Twitter 自由言語大学(Twifull) 札幌第三回勉強会　　2010/08/2

日本語オノマトペのかたち

野村明伸（@nov0513）

1. はじめに

日本語のオノマトペは、意味的に大きく分けて擬音語と擬態語にわけることができる。擬音語はものや生物がたてる音を、擬態語は物事の様子や動作、感情を表現する。オノマトペの意味は、音象徴という、音声がただの言語記号であることを超えて何らかのイメージを私たちに抱かせる、という性質が関係している。

筆者はこの音象徴について研究しようとしているが、現在使われている日本語のオノマトペは、『日本語オノマトペ辞典』（小野正弘・編（2007））によると3000 を超える。この 3000 を超えるオノマトペを一つ一つ検証していくのは無駄が多すぎるため、検証しやすい数にまとめたいと考えている。

本発表では、日本語オノマトペにおける形態的研究を改めて振り返ることで、今後の研究に役立てたいと考える。

2. 日本語オノマトペのパターン分類

オノマトペのパターン分類についての研究はいくつかあるが、ここでは天沼（1974）と金田一（1978)、そして田守・スコウラップ（1999）の研究について見ていきたい。

2.1 天沼（1974）

天沼（1974）は、拍の数によって以下のようにオノマトペを分類している。分類にあたって、一拍の特定の音を表す仮名の代わりに X,Y,Z,W を用い、基本と見られる形に付く長音を「：」、促音を「ｔ」、「リ」を「ｒ」、撥音を「ｎ」のように表す。

表１　天沼（1974）による分類

１拍のもの	1	X 型	ツ
２拍のもの	2	XY 型	スイ、ポイ、ペタ、シャン、チン

	3	Ｘｔ型	カッ、ギュッ、ゾッ、ペッ
	4	Ｘ：型	ツー、フー
３拍のもの	5	XYｔ型	ガリッ、ダラッ、ニョキッ、ポタッ
	6	XYｒ型	ケロリ、ダラリ、パラリ、ピリリ
	7	XYｎ型	ガタン、キョトン、バラン、ピョコン
	8	ＸｔＸ型	カッカ、キャッキャ、トット
	9	XY：型	スイー、フラー
	10	Ｘ：Ｙ型	スーイ、パーン、ビューン
	11	Ｘ：ｔ型	カーッ、キューッ、ポーッ
４拍のもの	12	XYXY 型	イライラ、ガリガチ、ヒュンヒュン
	13	XYZY 型	アタフタ、ギクシャク、ペチャクチャ
	14	XYXZ 型	キンキラ、ドンドコ
	15	XYZW−１型	カサコソ、ガタゴト、カラコロ
	16	XYZW−２型	チョコマカ
	17	XYZW−３型	ガタピシ
	18	XYZW−４型	スタコラ
	19	XYZW−５型	ゴタクサ、ノロクサ、パチクリ
	20	XYZW−６型	ホンワカ、ワンサカ
	21	XYｒｔ型	カラリッ、グルリッ、バラリッ
	22	XYｒｎ型	カラリン、サラリン、パラリン
	23	ＸｔYZ 型	ウッスラ、フックラ
	24	ＸｔＹｒ型	ウッカリ、ヒョッコリ、ポッコリ
	25	ＸｔＹｎ型	ゴットン、スッテン、ボッタン
	26	ＸｎＹｒ型	アングリ、グンニャリ、ノンビリ
	27	XY：ｒ型	スラーリ、ソローリ
	28	XY：ｔ型	ジローッ、ドサーッ、ボケーッ
	29	XY：ｎ型	がらーん、ショボーン、ブラーン
	30	Ｘ：Ｙｒ型	フーワリ、ユーラリ
	31	Ｘ：Ｙ：型	ガーガー、ニューニュー、ホーホー
５拍のもの	32	XYXY 型の末尾に促音「ッ」、又ははねる音「ン」を伴っ	カラカラッ、パラパラッ、（XYXYｔ型） ガラガラン、コロコロン（XYXYｎ型）

		ているもの	
	33	XYXY 型の第１拍と第２拍の中間に「ッ」が割り込んだもの、または第１拍の音が長音となったもの	ガッタガタ、ホッカホカ（Ｘｔ YXY 型） スーイスイ、フーラフラ（Ｘ：YXY 型）
	34	XYｎ型のＸとＹの間に「ッ」を割り込ませ、Ｙを長音化したもの	ドッカーン、バッターン（ＸｔＹ：ｎ型）
	35	その他のもの	コテンパン、ドンピシャリ
６拍のもの	36	３拍のものが重なったもの	ウツラウツラ｛XYZXYZ 型｝ ノソリノソリ（XY r XY r 型） ベロンベロン（XY n XY n 型） アップアップ（Ｘｔ YX ｔ Y 型） ウーロウーロ（Ｘ：ＹＸ：Ｙ型）
	37	３拍の異なった形のものを二つつないだもの	チラリホラリ（XY r ZY r 型） ドタンバタン（XY n ZY n 型） ガタンゴトン（XY n ZW n 型） ヤッサモッサ（Ｘｔ YZ ｔ Y 型） テンヤワンヤ（Ｘn YZ n Y 型）
	38	２拍のものを三つ重ねたもの	カンカンカン（XYXYXY 型） タッタッタッ（Ｘｔ Ｘｔ Ｘｔ 型） キンキラキン（XYXZXY 型） キンコンカン（XYZYWY 型）
	39	４拍+２拍のもの	ガラガラポン、チンチンゴー
	40	その他のもの	アッケラカン、スッデンドー
７拍のもの	41	末尾に促音「ッ」を伴っているもの	キラキラキラッ、バリバリバリッ（XYXYXY ｔ 型）
	42	末尾に「リ」を伴っているもの	クルクルクルリ、チラチラチラリ（XYXYXY ｒ 型）

	43	末尾に「ン」を伴っているもの	カラカラカラン、コロコロコロン（XYXYXYｎ型）
	44	末尾の一つ前に長音が割り込んでいるもの	カンカンカーン、ポンポンポーン（XYXYX：Ｙ型） タッタッターッ（ＸｔＸｔＸ：ｔ型）
	45	その他のもの	ガラガラピシン、シューシューバチン、スッテンコロリ、ノンベンダラリ
８拍のもの	46	異なった４拍のものを２つ結合させたもの	カタカタコトコト、ゴロゴロピカピカ、ワイワイキャーキャー、ズングリムックリ、ガッタンゴットン
	47	同じ４拍のものを２つ重ねたもの	カタコトカタコト、ガラゴロガラゴロ、ノッソリノッソリ

2.2 金田一（1978）

金田一（1978）も拍の数で分類を行った。特に１拍と２拍のオノマトペを「語根」としている。

表２　金田一（1978）による分類

1	一拍語のもの	ふ、つ
2	一拍の語根+「い」「ん」「っ」引く音のもの	つい、きゃっ、にゅっ、ぽん
3	二拍の語根のもの	がば、にゃお、ぴた
4	一拍の語根に+「い」「う」「ん」「っ」のうちのものが二個	ごうん、ぼいん、ぽうっ
5	二拍の語根+「っ」の形のもの	ごろっ、ばさっ、ぽかっ
6	二拍の語根+「ん」のもの	かちん、どきん、ぴょこん
7	二拍の語根+「り」の形のもの	ぐるり、ごろり、ぴかり

8	７の一種「り」でないもの。古風な語	うらら、しとど、そよろ
9	二拍の語根の中間に、つめ、はねの入ったもの	ざんぶ、むんず、かっか、きゃっきゃ、はっし
10	７の形の第一拍と第二拍の間に、はねる音、つめる音の入ったもの	あんぐり、ぐんにゃり、こんがり、どんぶり あっさり、がっかり、しっかり、しっぽり
11	二拍の語根の繰り返し	からから、きらきら、しゃりしゃり、するする、とろとろ いそいそ、かちかち、くしゃくしゃ
12	前項に似て類音のものを重ねるもの	あたふた、からころ、ぺちゃくちゃ、むしゃくしゃ
13	全く似ていない二拍を重ねたもの	がたぴし、ちょこなん。ちょこまか、ぱちくり
14	二拍語+「りん」「りっ」の形	くるりっ、ころりん
15	五拍のもの	ころりんこ、けろりかん
16	７・８・９の繰り返し	ぐでんぐでん、ごろんごろん、のたりのたり、ぱっかぱっか
17	16 に似てあとのものは、多少形のちがうもの	しどろもどろ、てんやわんや、のらりくらり
18	その他の六拍のもの	こけこっこう、すっからかん、とんちんかん、ほうほけきょう

2.3 田守・スコウラップ（1999）

田守・スコウラップ（1999）は、１モーラまたは２モーラの基本形を元に分類している。この基本形を「語基」と呼んでいる。ここでは、「C」は子音、「V」は母音を表しており、また「Q」は促音、「N」は撥音、「ri」は「り」を表している。

表３　田守・スコウラップ（1999）による分類

１モーラを語基に持つもの	1	CV	つ、ふ
	2	a.CVQ b.CVN	かっ、ちゅっ、ふっ、ぺっ かん、にゃん、ばん
	3	CVV	がー、ぎゅー、さー、ざー
	4	a.CVVQ b.CVVN	かーっ、ざーっ、ぱーっ がーん、きゅーん、ぽーん
	5	a.CVQ-CVQ b.CVN-CVN c.CVV-CVV	きゃっきゃっ ばんばん がーがー
２モーラを語基にもつもの	6	CVCV	がば、そよ、ひし、ぶい
	7	a. CVCVQ b. CVCVri c. CVCVN	ころっ、ばたっ、ぽきっ ころり、ばたり、ぽきり ころん、ばたん、ぽきん
	8	a. CVQCV b. CVNCV	どっか、すっく、はっし ざんぶ、むんず
	9	a. CVQCVri b. CVNCVri	がっくり、ばっさり げんなり、にんまり
	10	２モーラの反復した形態	きらきら、ばたばた、にこにこ、めらめら
	11	a. それぞれの語基の子音は同じだが母音が異なる b. それぞれの語基の第一モーラが異なる	がさごそ、からころ どたばた、ぺちゃくちゃ
	12	最初の２モーラのうりの第１モーラだけが変化して反復した形態	どぎまぎ、ちらほら、のらくら

	13	まったく異なる２モーラ同士が組み合わさった形態	がたぴし、そそくさ、すたこら、ちょここまか
	14	７b と７c の形態の反復	ぐさりぐさり、どきりどきり、ばたりばたり ころんころん、どきんどきん、ばたんばたん
	15	11 や 12 の変種	がたんごとん、からんころん、どたんばたん がたりごとり、ちらりほらり、のらりくらり
	16	特殊な形態	こけこっこう、すっからかん、ほうほけきょう

3. 語基とオノマトペ標識

前節で紹介した３つの分類の研究は、表記の仕方は異なるが、１拍または２拍の基本的な形が組み合わされてパターン数を増やしているということと、基本形に促音や撥音、長音、「り」音が特殊な音として扱われているということである。

多くの派生形を生み出す基本形のことを、金田一（1987）は「語根」と、田守・スコウラップ（1999）は「語基」と呼んでいる。本発表では、始めから基本形を念頭において分類している田守・スコウラップ（1999）にならって基本形を語基と呼ぶことにする。

この語基、とくに２モーラの語基が反復されることで「日本語オノマトペのもっとも一般的な形態」（田守・スコウラップ（1999））が作られる。また、反復の他には語基に促音や撥音、「り」音が付け加えられることでさらに日本語オノマトペはパターンを増やす。これらの語基についてパターンを増やす要素を「オノマトペ標識」（Waida（1984））と呼ぶ。

これらの派生形は無意味にあるのではなく、もとの語基と少しずつ意味に差が出てくる。語基の後ろに付加される促音「っ」は「瞬間性」「スピード感」「急な終わり方」を表し、語中に挿入される促音は「強調」を表す。撥音「ん」は「共鳴」を、「り」は「完了」や「ゆったりした感じ」を表現する。長音は擬音

語においては物理的に長い音を描写し、擬態語では強調となって現れる。語基が反復されると音や動作の反復は繰り返しが表現される。（田守・スコウラップ（1999））

角岡（2007）は、上記に加えて「無声子音の有声化」「硬口蓋音化」「摩擦音／破擦音交替」もオノマトペ標識として考えられると述べている。

音象徴の考察へと進むに当たって、以上述べて来た先行研究のオノマトペの分類とオノマトペ標識は妥当か否か、そして発展させられることがあるとすれば何か、ということを考えていきたい。

引用文献

天沼寧（編）（1974）　『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版

角岡賢一（2007）　『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体型性について』くろしお出版

金田一春彦（1978）　「擬音語・擬態語概説」『擬音語・擬態語辞典』（浅野鶴子編）、角川出版

小野正弘（編）（2007）　『日本語オノマトペ辞典』小学館

田守育啓、ローレンス・スコウラップ（1999）　『オノマトペ：形態と意味』くろしお出版

Waida Toshiko (1984)　“English and Japanese Onomatopoies Structures”,in *Bulletin of Osaka Women’s University*, Studies in English, 36.